

2022年度 みんなのルールメイキング調査研究報告書

2023年3月28日
認定NPO法人カタリバ
みんなのルールメイキング事務局



みんなのルールメイキングプロジェクトは、生徒が中心となり先生・保護者などの関係者と協働して校則・ルールを見直していく教育プログラムである。立場や意見の違う人たちと対話をしながら納得解をつくる経験を通じて、身の回りの課題に気づき、当事者意識をもって行動する力や、社会参画への意識を育むことを目指している。

本プロジェクトは2019年にスタートし、全国の学校と連携して、校則を見直す取り組みを広げてきた。経済産業省「未来の教室」実証事業に採択され実施している。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (1)調査概要

ルールメイキングを実施することで得られる**生徒への教育的効果・教員や学校への波及効果**について、**中長期的に検証していく調査**を行った。ルールメイキングに取り組んだ生徒がその後どのように成長するのか、ルールメイキングに取り組んでいる学校は活動を継続することでどのように変容していくのかについて、ロングスパンで調査研究を行うことでルールメイキング効果とその要因を明らかにすることを目的とした調査である。

リサーチクエスト(研究課題)

教員の変化	RQ1	ルールメイキングの活動は、関わった教員にどのような変化をもたらすか？(またその要因とは？)
		考えられる変化の例： 教員間の信頼関係の改善／失敗を許容できる文化の醸成 等
学校の変化	RQ2	ルールメイキングの活動は、学校(全教員・全校生徒等)にどのような変化をもたらすか？(またその要因とは？)
		考えられる変化の例： 生徒の効力感／RM以外の活動への影響(授業・行事)等

調査対象校

■調査対象校

ルールメイキングの実践を2年以上継続して実施している7校

■学校特徴の内訳

- ・2020年度参加校(1校)・2021年度参加校(6校)
- ・公立(4校)・私立(4校)
- ・中学校(2校)・高等学校(4校)・中高一貫校(1校)

調査方法

①質問紙調査

- (1)対 象:対象7校の全校生徒・全教員
- (2)実施時期:2022年12月5日～2023年1月25日
- (3)質問項目:
【全校生徒】学校風土/関心・参画意欲/ルール認識等に関する全23項目
【全教員】生徒への信頼/対話的文化/実践の変化等に関する全22項目

②インタビュー調査

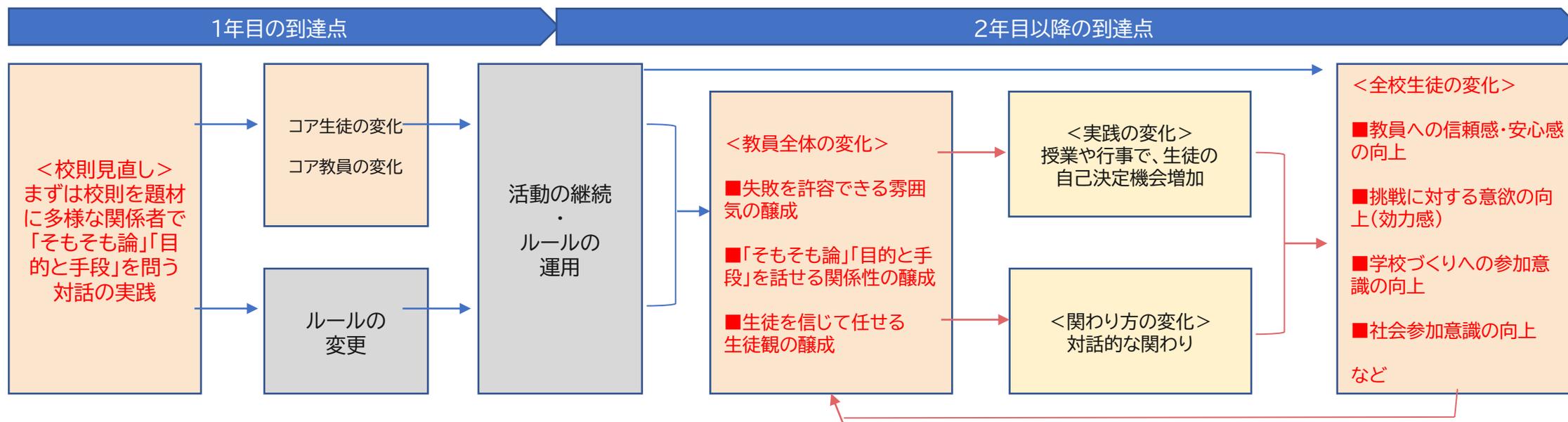
- (1)対 象:対象7校のルールメイキング担当教員
- (2)実施時期:2022年12月5日～2023年1月10日
- (3)質問項目:担当教員自身の変化・他の教員の変化・全校生徒の変化
2年目の課題等に関する全8項目

研究推進体制

- 研究統括:古田 雄一(筑波大学)・古野香織/山本晃史(NPOカタリバ)
- 定量調査協力:小栗 優貴(愛知教育大学・非常勤講師)
- 定性調査協力:奥村 尚(独立研究者)・浜田未貴(NPO法人DAKKO)

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (1)調査概要 リサーチクエスチョンの背景にある「学校変化のメカニズム仮説」

ルールメイキングの取り組みの2年目以降は、下記の図で示す通り、「コア生徒・コア教員の変化」からさらに「教員全体の変化」「全校生徒の変化」へと効果が波及していくと考えられる。ただし、「教員全体の変化」「全校生徒の変化」といったより広い範囲で変化が起こるには、ある程度の時間が必要と考えられ、さらにルールメイキングに加えて、学校ビジョンや方針、授業改善の取り組みなど複数の実践が要因となるのではないかという仮説を立てた。1年目の短期的な研究では十分に検証できていないため、追記調査を通じて明らかにすることとした。



・既存のビジョン、目標、方向性
・魅力化など特殊テーマ

それ以外の文脈での取り組み・学校改善

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

1. 担当教員の変化

担当教員の変化① 「まずは聞く」という意識への変化

ルールメイキングを通じた担当教員の変化として、教員としての考えはあるものの、頭ごなしに否定するのではなく、まずは子どもたちの声に耳を傾け、意見の背景にあるものを探ろうとする意識が醸成されている。ルールメイキングの活動を通じて、これまでであれば「絶対駄目」と拒否していたような内容でも、まずは受け止める姿勢に変わったと語る教員もいた。こういった教員の変化が、後述の「生徒による意見表明の増加」など、徐々に生徒の変化にもつながっていると考えられる。

【インタビューから】

他学年のフロアに行ったりとか、他のクラスに入っちゃ駄目っていうふうなルールがあるので、それもあって他のクラスの子たちと話したいけど学校でも、なかなか話せないからスマホでやり取りしたらいい、って…1年前だったらそんな駄目絶対言ってますけど。絶対言ってみましたね。笑 ちゃんとその根本というかその理由を聞かなあかんっていうふうには、自分の意識も変わった。…学年の先生に相談して、いやそれはもう昔からというか、こうこうこうだったみたいな、言われたら、確かにそうですね、そのまま伝えますとか。だけど今は理由聞いた上で、その理由も含めて、学年の先生に相談したりとか、というふうになんかちょっと変わったというか、自分の中でも。

担当教員の変化② 生徒と会話するきっかけ、生徒理解

ルールメイキングに関わることで、より生徒を深く知るきっかけになったとの声が見られた。教科担当や担任とは違った立場で生徒と関わることで、生徒に質問を投げかけたり逆に生徒から質問を投げかけられるなど会話の機会が増えることに繋がったことが理由として挙げられる。

【インタビューから】

えっと、僕は今年から入ったんですけど、まあこの学校初めて来て、まあルールがどういうものか、っていうのが分かるきっかけになりましたし、で生徒ができない、まあさっきの流れでスケジュールができないとか、そういうのって、ルールメイキングに限らず、まあ授業とか提出物とかそういうところからも見えるから、生徒を知るきっかけになるし、生徒がやっぱ思ってることを、会話するきっかけになるから、だから生徒理解につながるから、そこで会話する生徒と、やっぱ関係が生まれて、じゃあこういうことはどう？っていうふうになるから、そういう別の意味合いで、まあ生徒を知ることはなかったのかな、っていう風には思います。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

1. 担当教員の変化

担当教員の変化③ 生徒とのフラットな関係性の模索

一般的に教員が生徒の行動を指導することはあっても、その逆は想像されない。しかしルールメイキングは生徒-教師間の指導する/されるという関係から、よりフラットな関係性へと変化させうることが示唆される。ある学校では、これまでよりも生徒が教員への相談をしやすくなったり、生徒から教員による指導方法の問い直しという行為が見られるようになった。

【インタビューから】

良くも悪くも、なんていうかな。生徒と職員のこの位置関係みたいなのがだいぶこう、段差なくなってきた感じ、はしますね。…まあ生徒指導っていう立場で言うと、問題が起きたときでも、結構報告がすぐしやすいとかね。家のことで困ったことがあったときにも、先生すぐ相談しやすいみたいな。仲よし関係ではないんだけど、そういう関係っていうんですかね。これって駄目だと思うんですけどみたいな。そういうのも話やすい雰囲気っていうのかな、っていうのも感じますね。

担当教員の変化④ 担当授業の内容・手法・姿勢の変化

ルールメイキング導入以前は授業空間を教える場として捉え、教員がリードしていたのに対し、導入以後は生徒へ聞く、生徒からの発言を待つという姿勢が生まれていることが分かった。ルールメイキングの活動を通じて生徒主体という考え方や、生徒を学校空間において平等な存在として尊重するという意識が芽生えたことが影響していると考えられる。また社会科教員の変化として、授業と授業外の学びを往還させる重要性に気がついたという変化も見られた。

【インタビューから】

授業はすっげえ変わりました。自分は。まず自分が喋らなくなりましたね。ずーと今みたいな感じでずーっと喋ってたんですけど。授業中。でも聞くことが増えましたね。端的にいうと。最初僕の授業だと思っていたんですけど、やっぱりみんなの授業だなというか。みんなで育っていかないとすとすごく思うんで最近。だからこう。年齢の違いや立場の違いはありますけど、学びの空間だったり、こういう一個の学校の教室という場所にいるんだったらお互いが持っている権利があって。学ぶ権利と学ばせなきゃいけない義務があるのかな。仮に。うまく言葉にできませんけど。まあまあお互い対等じゃないですけど、やっぱり主権者というか、学びの主体にならなきゃいけないのは生徒たち一人ひとりがなるべく均等にそういう時間を設けるにはどうしたらいいかなを考えると何か変わってきましたね。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

2. 学校全体の変化

学校全体の変化① 校則改定後に醸成される生徒への信頼感

実際に校則の改定を行った学校では、生徒が改定後のルールを理解し、自分で判断し行動する姿を見て、教員の生徒への信頼感が増していた。主体的に考え、行動することができる生徒というまなざしへと変化したことが、②「生徒を信じて任せてみる取り組みの広がり」にも繋がっていると考えられる。

【インタビューから】

学校が変わってきたところという、今回通学靴を、色の指定なしにしたんですよ。で、体育の時間とかグラウンドでやっている、通学靴でみんな体育とかやっている、どんなもんかなっていうふうに見てると、黒が多かったり、白でちょっとラインが入ってるやつだったりというふうで。おおおこれか！みたいな、本当なんか、驚くような色の靴を履いてきている子はいないんですよ。何かその辺りも、説明してないんですよ、色の指定なしっていうところまでしか言っていないんだけど、この靴を見ると理念少し頭の中片隅に残ってくれてるかなっていうのを思ったりします。…一人一人には確認してないですけど、頭の中に入ってるのかなっていうところは、思います僕は。

学校全体の変化②

「生徒を信じて任せてみる」取り組みの広がり

教員は「生徒を信じて任せてみる」、生徒は任せられたことで主体的に活動する、という循環を通して、学校全体へ「生徒を信じて任せてみる」取り組みが広がる様子が見られた。こうした循環が回るためには、まず教員から行動する必要があるが、生徒が本当に活動できるのかが教員側の不安として語られていた。しかし教員はルールメイキングによって子どもの活動の様子を見ることで、不安が少なくなり生徒に任せやすくなると思われる。

【インタビューから】

体育祭がこの前12月にやったんですけど、やっぱり運営も委員会の生徒がやって、競技内容も生徒会中心に意見集めて、教員に提出して、その競技をやるみたいな形でやりました。やっぱりいままでだったらそんなことありえなかったの。来年はさらにそうやって行事は生徒発案で増やす、その球技大会とは別に増やそうみたいな形になったりとか…あとは生徒のポロシャツ、夏服のポロシャツですね、生徒から前から欲しいって声あがってたんですけど、先生から、教員側からもそれやってみるかみたいな形で、来年それをちょっと導入しようかみたいな、になりまして。そのデザインとかも、先生たちのほうから生徒に意見を聞きたいみたいな感じで、生徒指導が提案してくれて、まあ生徒の意見を聞こうっていう雰囲気はやっぱりなかったの、やっぱり行事とかそういった、学校の生徒指導の在り方も含めて変わってきてるなっていうのは思いました。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

2. 学校全体の変化

学校全体の変化③

教職員間のインフォーマルな場での意見表明の増加

ルールメイキングの実践が後押しとなり、担当教員以外の教員から、校則に限らずさまざまな場面で意見表明が行われる様子が見られた。例えば、最初は立ち話のなかでルールメイキングで取り組んでいる内容についての意見が寄せられ、次第にフォーマルな場(職員会議)での意見表明につながった例も存在する。インフォーマルな場での教員の意見表明を契機に、これまで学校で当たり前とされてきたルールや習慣についてその都度検討の場が持たれたり、実際にルール変更が行われる場合もあった。ルールメイキングの取り組みにより、生徒だけでなく、教員にとっても意見表明がしやすい環境へと変わってきている兆しが見える。

【インタビューから】

最近ある先生が、こういうことも見直していかなくちゃいけないんじゃない？って言ってくれたんですよ。うん、なので、え！と思って、去年駄目だったのに、今年はそういうのも見直していくべきだ、見直していかないと、ちょっともう恥ずかしいんじゃないみたいな。委員会ね、もうそうやってルールメイキングをずっとやってるわけだし、えっと委員会の子たちも一生懸命頑張っているのに、何でそういうところが変わっていかないんだみたいなことを言われたんですよ。…その先生も、何て言うんですか、勇気を持ってというか、意を決してというか、公の場で言いたいって言ってくれたんですよ。

学校全体の変化④

教職員間の会議(フォーマルな場)の雰囲気の変化

職員会議の場が民主的な空間として開かれるという変化が見られた。例えば従来は一方的な報告の場となっていた職員会議において、以前からやり方に違和感を持っていた教員達が議論の場とするような動きを見せた学校があった。また、決議の際に多数決へ疑問を唱えたところ、周囲の教員がその意見に共感を示したという事例も存在する。以上のことからルールメイキングが重視している対話や民主主義的な視点が、担当教員以外の教員にも影響を与え、職員会議の場自体を変革する可能性を持っていることが示唆される。

【インタビューから】

会議のやり方が変わりましたね。うち会議が会議じゃなくて、なんかこう報告だったり、協議と言っという協議はしないんですけど、だからプリント一枚配ればいじゃんって当初思ってたんですけど、ですけどそういう意識を持ってらっしゃった方々が、…やっぱ民主的ってこういうことかな、違うよねとか、ワンマンじゃないですけど、そういうやり方だけ、しょうがないよね、と思っていた方々がなるほどこういうやり方があるのねっていう。多分方法論的にはご存じだったと思うんですけど、ああやって良いんだっていう勇気が出たんじゃないかなって勝手に思ってます。勇気が出たというよりか…俺もやっていいじゃんみたいな、そういう感じですね。

⑦

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

2. 学校全体の変化

学校全体の変化⑤

そもそもに立ち戻る意識の醸成・業務改善への展開

ルールメイキングを通じて、これまで学校の中で当たり前に行われてきたことが本当に必要かどうか検討し、そもそもに立ち戻る意識が醸成されてきている。新たに検討論点となっている事項は、例えば部活動の全員加入や、自動車教習所の許可願、アルバイトの可否、進路指導の方法に至るまで様々である。この変化が特に強く見られるのは教員組織内であるが、ルールメイキングで校則・ルールを変えたことをきっかけに、教員間での対話や意見表明の土壌が生まれたことも後押しとなり、本質に立ち戻る姿勢が生まれていると考えられる。こういった意識の醸成は、校長の働きかけなども後押ししており、学校の働き方改革や業務改善などにも繋がる可能性を持っている。

【インタビューから】

去年までは当たり前のようにやってたけど、実際これって絶対やる必要あるのかなとか。そうそう子供に伝える内容についても、ここは、逆にここは子供には絶対伝えてあげなかんやろうとか、そういうふうな、なんか本当これまでに縛られずに1個1個考えるっていうのは、学年会を聞いていても感じるどころかあったりとか、日常の会話とかでも感じたりしますね。…どういった内容だったかな。んーと、それこそなんだろう。なんか進路、まさに進路のこととかで。

学校全体の変化⑥

学校の特色としての「ルールメイキング」

校則見直しの取り組みをきっかけに、学校の特色としてルールメイキングを位置づけ、さらに生徒主体のプロジェクト・学校づくりを推進していこうとする動きが見られた。その背景には、学校が変わらなければいけないという管理職・教員の危機意識も存在する。学校特色として位置づけることで、プロジェクトをより発展させていき、生徒の声を取り入れながら学校により良い変化を生み出そうとしていた。現在、どのように学校の特色としてルールメイキングを習慣化・制度化できるのか、試行錯誤が重ねられている。

【インタビューから】

学校変えてかなきゃいけないみたいなことを今年すごい言ってるんですよ。そのなかで、結構やっぱこの校則見直しを肯定的に解釈して、すごい位置づけてるんですよ。やっぱこういう動きもあるんでみたいな。もっとこういう活動を、地域でもボランティアとかそういう方向に広げていきたいと思います。まさか去年今年の校則見直しがこの学校の特色みたいな形でいまちょっと、徐々に校長からの話によって先生たちに伝わってきてるところあると思うので、それがたぶん今年の体育祭の生徒の提案とかそういったところにつながってるのもあるので。たぶん学校の風土とか特色とかになっくんじゃないのかなとは思いますが。生徒主体で何かプロジェクトみたいなのをやってみたいな。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

2. 学校全体の変化

学校全体の変化⑦ 地域社会・保護者・他校からのまなざしの変化

ルールメイキングによって地域社会や保護者が学校運営に参加する回路を構築することができる。また、地域社会や保護者は学校運営に参加することで生徒の教育に関わる当事者としての意識を持てるようになることが期待される。さらにある高校では、市内の中学校からの見られ方が変わったこと、高校入試の倍率が上がったことが見られた。ルールメイキングによって地域社会や保護者、他校からのまなざしが変わり、その効果が学校に還元される循環が生まれている。

【インタビューから】

・子供たちが自分たちで自分たちのルールを変えていくことで自信をつけたように、保護者に、今度、学校のルール、特に制服のことを中心にしてただだけれども、それを考えてもらうってということで、自分、私達の意見を聞いてもらえるのってというか、みんなが作ってるんですよってところで、何か学校を作っていく一員なんだっていうか、学校、自分自分たちの子なんだ自分たちの学校なんだっていう意識が少しずつこれまで広げていく段階ですけど、まだ参加している方が限られているので。…PTAもその何か、役をやらされるみたいな、そういうのがあるんだけど。今回制服フォーラムやるよって言うと、そこに興味のある人とか、は自分で来るんじゃないですか。年間通して何か役をやらなとか言うと、それはやっぱり手間かかるしてなんだけど、でもこの日のこの会って言うのだったら、何か集まりやすかったり、興味のある人は来てくれるので。

・中学校の先生がうちの学校にいらっしゃったときに、やっぱりここはすごい校則厳しくて悪いこうなんか更生させるような学校だっっていうふうなイメージがあったらしいんですけど、テレビとかの報道で見て、やっぱりすごくいい学校に変わったんだねみたいな、てことを学校の生徒たちに言ってくれたみたいで。その影響も分かんないですけど、今年倍率が上がりまして、志望の。なんかその意味で地域に影響あったりしてるのかなと思います。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

3. 全校生徒の変化

全校生徒の変化① 生徒から教員に対する意見表明の増加

全校生徒においては、校則やルール以外の場面においても、生徒から教員に対して意見を表明する機会が増えている。生徒の意見は、必ずしもまとまったものではなく「ちょっとした違和感」として表出するケースも多々ある。例えば、全体で強く指導される場面において、そこまで強い言葉で指導をする必要はあったのか、個別に指導すればよかったのではないかなど、教員の指導方法について生徒が問いかける事例なども存在した。またスマホの持ち込みなどの意見が対立しやすいテーマにおいても、生徒と教員間での関係性が構築されてきたからこそ、これまでよりも互いに意見を伝え合いやすくなったと考えられる。

【インタビューから】

こっちの方がいいと思うんですけど、みたいな話とか。先生のこれちょっと、違うと思うんですけどみたいな。…なんかちょっと違うんじゃないのっていうところを、今までは心に留めて終わっていたところが、声を出すようになったっていうのはこういう活動の成果と言っているかあれですけど、繋がってるところあると思いますね。…なんとなく、その校則じゃなくて自分たちの教室を作るのは自分たちじゃないけど、学校を作るのは自分たちみたいな、ちょっとそこでおかしなこととか、ちょっと違うんじゃないのっていうときには、声を上げるみたいなね。そういう動き出しができるようになってきた子が増えてきたというか。

全校生徒の変化② 全校生徒への「効力感」の波及

また生徒主体の行事運営、全校クラス会議などの取り組みも後押しして「自分たちの意見を聞いてもらえる」という感覚が生まれ、自分も学校づくりに参加したいという自己効力感や参加意識が生徒全体に波及している様子も見られる。こういった効力感の高まりが、さらに居心地のよい学校にするために、生徒たちの主体的な行事運営や校内清掃などの形で、実際の行動に現れているシーンもあった。

【インタビューから】

結構自分勝手な学年だったのが、みんな楽しくしようとか、みんなでやろうっていうような空気感が、3年生になって強く出て。最高学年になって。だからその、子どもらの、が、居心地がすごくいいっていうのもあるとすごく思うんですけど、なんか、否定的に考える子が少なくなったというか。…1年生のときはずっと壁…壁というか、教員は敵、みたいな、なんか腹割って話されへんような感覚はあったんですけど、今全然そんなことなくて。先生も一緒に、えっと、居心地のいい空気感を作れるというか。なんか、子どもらがそこに安心して過ごせるっていうところは3年生、あるかもしれないですね。なので、もっとこうやっていきたいとか、もっと自分らはこうやったら楽しめたんちゃうんかなとか、前向きに考えれる意見は出たんちゃうんかなと思うんですけど。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

4. プロジェクト2年目の課題

プロジェクト2年目の課題① コアメンバーでの活動継続性の課題

2年目の課題としては、まずコアメンバーでの活動継続の難しさが挙げられていた。コア生徒の入れ替えにより「1年目を知らないメンバー」が活動の中心となり、これまでの思いやノウハウの引継ぎに難しさを抱える学校も出てきている。これはコア生徒だけでなく、コア教員の入れ替えの場面でも同様の課題が発生している。またプロジェクトを継続することで、学校や校則に関する満足度が高まり、校則改定への熱量が下がったり、課題設定に困難を抱えるケースも存在した。

【インタビューから】

やっぱり最初はすごく校則に対する不満っていうのはまあ率直にたまってたところあると思うんですけど、一番変えたかった校則の部分っていうのを1年目に結構変えましたので、…1年目の時は9つ候補が出て、その中のまあより重要性だとか、実現性を含めて高いものっていうところを3つ取捨したわけですけど、そこに残ってた6つの中のものいくつかは今年度のテーマになってたりもする…なので、そういう意味では若干、いい意味で校則に対する満足度が上がると、変えていこうっていう熱量が下がるみたいな。そういったところもありつつかなあということで、はい、その辺がちょっと苦労点としてあります。

プロジェクト2年目の課題② 生徒全体の意識変化の困難性

コア生徒以外の生徒の当事者意識の醸成が難しいという意見が課題が見られた。上記はコア生徒が企画したイベントへの参加率の低さ、変わる方法はあるにも関わらず校則が変わらなかったことへ不満が挙がっている点などから窺える。コア生徒はルールの変革の「過程」を体験しそこからの学びを得ているのに対し、周辺の生徒には十分に活動の内容が伝わっておらず「結果」としてルールメイキングを捉えていると言った違いが原因の一つとして指摘することができる。またそもそもルールに関心を示しておらず、破ってしまえば良いもの、変わっても変わらなくてもどちらでも良いと言った意見も見られ、学校をよくしたいという意識自体をいかに育むかということも課題の一つである。

【インタビューから】

変わればラッキーやし…変わらなくても、別に、はいはい、みたいな感じの生徒ら多くって…変えるっていうチャンスはあるのに、なんで変わらへんねん、みたいな。あの、ルールメイキングに携わってない子らは。(略)なんで校則変える変えるって言うてるのに、なんか、全然変わらんやん、って。こんだけルールメイキングの調査とかでも…変えろって意見多いのに、なんですぐ変わらへんのや、みたいな感覚は絶対あるかなって思ってますね。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

4. プロジェクト2年目の課題

プロジェクト2年目の課題③ 教員全体の意識変化・積極的な参加の難しさ

複数の実証校教員から、管理職やコアとなる教員がけん引していく重要性は語られた。しかし、教員全体の意識の変化や行動を生み出すためには、コア教員だけでなく、いかにそれ以外の周囲の教員をルールメイキングに巻き込んでいくかが課題となる。またルールメイキングに理解は示すが、実際の行動や生徒への指導として実践することは難しい場合があることも考慮すれば、どのように根本的な意識変革が可能であるのかを検討する必要がある。

【インタビューから】

取り組み自体は評価するけど、自分がそれに関わりたい、ではない。つまり、そういう取り組み、あ、うちの学校がっていうんじゃないで、そういうことを生徒たちが考えれるっていう場所は、たしかにあっても良いよねと。だけど、それをうちの生徒がやるってことについてとか、それを自分が関わるってことについては、肯定的ではないっていう。否定的とは言っていないです、肯定的ではないっていう、感じはあるんじゃないかっていうのと…そういう活動いいよね、って言うたり、例えば話したりはするけど、他との言動の不一致がめっちゃあるっていう意味ですけど。(略)その先生の中で、不一致が起きてるから、活動自体は良い、良いと思ってるとは言うけど、本質的には良いと別に思ってるわけじゃないっていうところは、すごく感じます。

プロジェクト2年目の課題④ 学校だけでなく、周囲も一緒に変わる必要性

また学校の都合だけではなかなか状況を変えることができないという難しさも存在する。ルール改定の方向性によっては、保護者が責任・判断する範囲が広がる場合もあり、今後理解の輪を広げられるか不安を抱える教員の声もあった。また特に公立校においては、さまざまな側面において近隣地域の学校とも足並みをそろえる必要があり、特定の学校だけが変わるのが難しい場面も存在する。保護者や地域全体も巻き込みながら、慎重に取り組みを進める必要性についても語られていた。

【インタビューから】

校長の意識だったり、教育委員会の意識だったり、なんだろうな。まだやっぱり古臭い校長の意識を持っている人たちもいる。昔ながらの調和を大事にする。現職の校長会でもまだ何かそんな意識が流れているようなところも、その辺かな。…結局制服も、この春に間に合わなかったのは、市内の校長、市内の学校をある程度揃えていくことが必要だろうみたいなところで…うんだからその辺の難しさですね。別に市内で合わせる必要ないのにね。…どっかの学校だけをこのジェンダーレスなり多様な、多様性に考慮した制服を入れてくっていう、学ランセーラー服に新たな服を加えるっていう改正をするっていうことを、ある学校だけがやるっていうのはどうかっていう。…なかなか難しい。そういうところですね壁は。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (2)定性調査 結果及び考察

4. プロジェクト2年目の課題

プロジェクト2年目の課題⑤ 指導観の「ゆらぎ」という課題

校則が見直されるようになることで、「校則だから」を理由とした生徒指導ができなくなる。しかし学校現場では校則を明確な基準としてきたこともあり、校則の見直しによって生徒指導が「ななあになんかになってきている」という語りも得られた。特にある教員が「生徒の主体性という隠れ蓑」と表現したように、校則を生徒主体で見直すことは、教員による生徒指導を行わない理由ともなり得る。しかし、校則を見直すからこそ、何をどこまで教員が指導するのかが問われているとも解釈できる。このとき、教員はもちろん、教育研究者や政策立案者、保護者などあらゆる関係者が「生徒を指導する」ということの意味や必要性、その具体的なあり方について考える必要がある。

【インタビューから】

今までだったら、たとえばですけどツープロック、はい、だめです。なぜなら校則ですから、が通用しなくなってきたっていう多分そういう実感があるんだと思います。…よくも悪くも線をスパって切ったものが、なんかななあになんかになってきていることが多くて…なんていうの、生徒の主体性という隠れ蓑を使って指導が怠惰になってる。…僕はこれいいことだと思ってるんです。やっぱり自分ごと化されてないというか自分の学校の校則だったり、自分の生徒に対しての指導が自分の責任で腹括って指導しているというか…学校が決めたからとか校則で決まっているからっていうロジックで生徒の声を潰してきた例っていくらでもあると思いますし、今現在でもあると思うんですよね。そういう権威主義的な武器を使わずして、じゃあどうやって生徒を指導するって言うか…じゃあそういうのをとっばらちゃった生徒の指導って何なのってことだと思うんですよね。僕は、だから成長させられるかどうかだし、自分も成長できるかどうかだし、なんか自分をもっと成長させなきゃだめだとか、それが学びへの意欲というのが学校という現場は一番だと思うんですけど、やっぱり人として成長しなきゃいけないとか、やっぱり社会的に生きるってこういうこと大事だよなっていかに生徒に実感させるかってことだと思うんですよね。説得力を持って。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (3)定量調査 結果及び考察

教員への質問紙から ①プロジェクト開始前からプロジェクト2年目終盤にかけての変化

2021年度実証事業校(6校)の教員へのアンケートについて、実証事業開始前と、2022年度の結果(2022年12月～2023年1月実施)を比較したところ、プロジェクト開始前とプロジェクト2年目終盤では、「この学校の校則は適切だと思う」「この学校のルールは適切だと思う」「この学校のほとんどの教員は、変化に対して前向きである」について、肯定的な回答(そう思う・まあそう思う)をする割合が増加している。ルールメイキングの活動が、校則やルールに対する教員の納得感や、学校をより良く変えていく風土の醸成に寄与していることが読み取れる。

【註】※小数点第二位を四捨五入

※安田女子中学高等学校のデータを除く

※%表記は、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「わからない」「無回答」の合計人数を100%として、算出したものである。

項目：
この学校の校則は適切だと思う。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	7.5%	47.7%
第3回目	14.6%	49.4%

項目：
この学校のルールは適切だと思う。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	7.5%	50.0%
第3回目	10.8%	55.1%

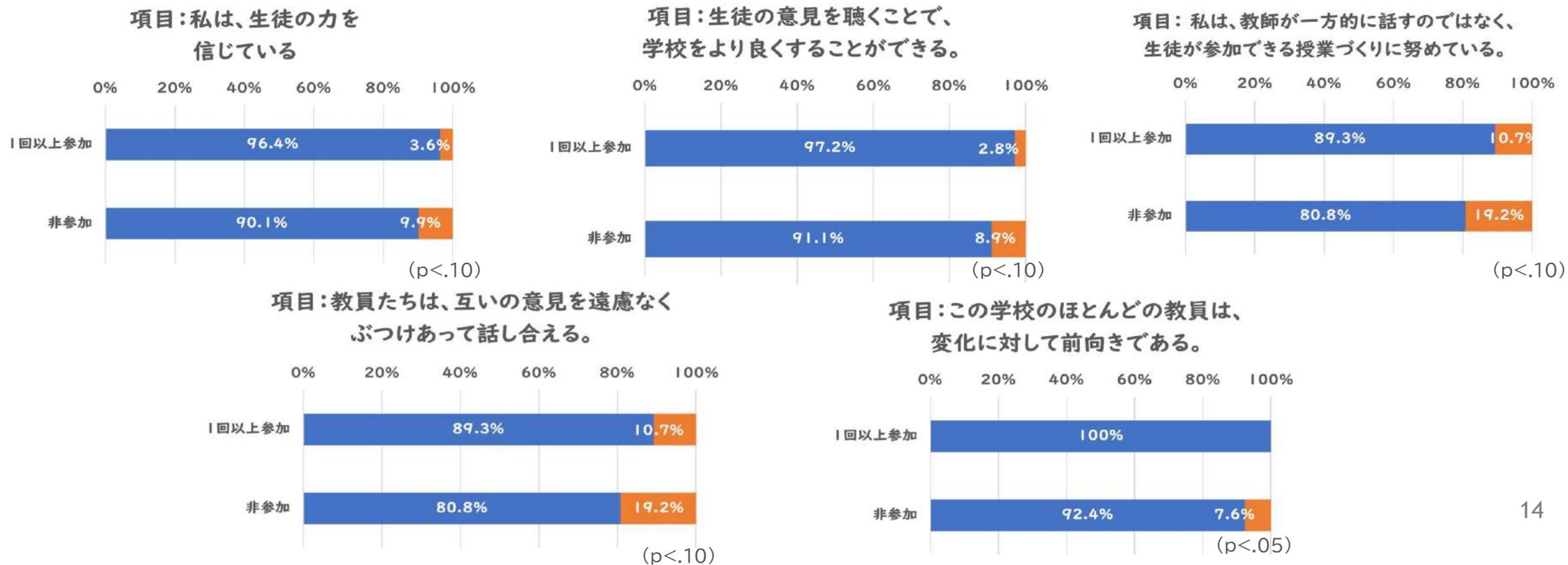
項目：
この学校のほとんどの教員は、
変化に対して前向きである。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	5.1%	32.7%
第3回目	12.0%	32.9%

教員への質問紙から ②ルールメイキングへの参加回数による比較

ルールメイキングに関連する活動に1回以上参加した教員は、そうではない教員に比べて、下記に示す項目についての肯定的回答の割合が、(統計的にも一定程度有意に)高かった。ルールメイキングの活動に関わる教員は、生徒に対する期待も高く、そのことは自身の授業でも生徒の参加を意識する傾向にも反映されているといえる。あわせて、教員間の関係に対して前向きな認識をもつ傾向がみられる。(因果関係を断定できるわけではないが)ルールメイキングの活動への参加経験が、教員の生徒観や授業観、教員関係の認識と関係していることがうかがえる。

【注】※青色は、項目に対する肯定的回答(そう思う+まあそう思うの合計)を示し、オレンジ色は、項目に関する否定的回答(あまりそう思わない+そう思わない)を示す。
※パーセント表示は、小数点第2位を四捨五入している。



生徒への質問紙から ①プロジェクト開始前からプロジェクト2年目終盤にかけての変化

実証事業開始前(第1回)、実証事業1年度目の終期(第2回)、その後の時期(2022年12月～2023年1月)(第3回)の3時点で行った生徒へのアンケート結果を比較した。年度をまたいでいるため対象となる生徒集団が異なる点に留意が必要であるものの、「生徒が協力すると、この学校に良い変化が起こる」「この学校の校則は適切だと思う」「この学校のルールは適切だと思う」「自分の意見には価値があると思う」について、肯定的な回答の割合が増加傾向にある(特に「生徒が協力すると、この学校に良い変化が起こる」は、回数を増すごとに増加している)。大幅な伸びではないものの、ルールメイキングを実施した学校で、生徒の校則・ルールに対する前向きな認識が徐々に生まれ、また生徒が自分たちの意見や参加に価値を感じ、学校をより良く変えていくことができるという感覚が少しずつ広がっていることが示唆される。

【註】※安田女子中学高等学校では、実証事業実施時期が他の学校より1年早かったため、第2回から第3回の期間が他校よりも空いている。
※%表記は、「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「わからない」の合計人数を100%として、算出したものである。

項目:この学校のルールは適切だと思う。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	15.4%	41.5%
第2回目	16.7%	45.7%
第3回目	16.5%	45.5%

項目:この学校の校則は適切だと思う。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	12.0%	36.2%
第2回目	15.3%	43.2%
第3回目	13.5%	42.2%

項目:生徒が協力すると、この学校に良い変化が起こる。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	30.1%	32.2%
第2回目	34.3%	39.3%
第3回目	36.2%	41.1%

項目:自分の意見には価値があると思う。

	そう思う	まあそう思う
第1回目	16.2%	28.9%
第2回目	14.7%	30.7%
第3回目	19.2%	31.9%

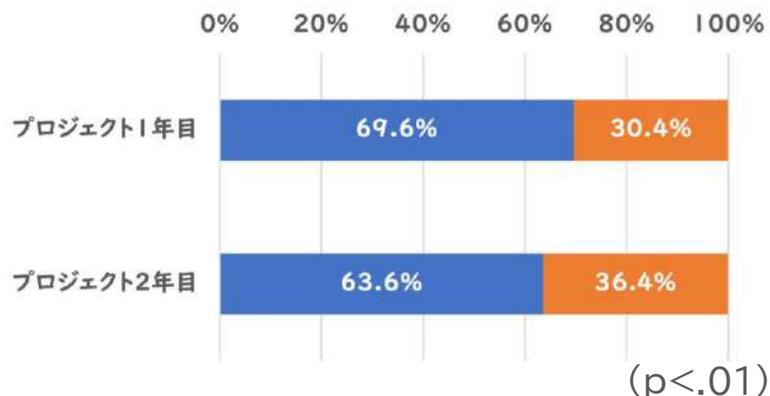
生徒への質問紙から ②「学年間の比較(プロジェクト経験年数による比較)」

2022年度に実施した生徒アンケートについて、ルールメイキングの活動が2年目以上である学年(例えば高校であれば高校2年生以上など)と、まだ1年目である学年(高校であれば高校1年生など)とで比較をしたところ、学校への愛着、ルールの適切さ、先生が意見を聴いてくれるという感覚について、肯定的な回答の割合が有意に低下した。仮説的に考えられる理由としては、学年が上がるにつれてこうした感覚が相対的に低下しやすいものの、ルールメイキングの活動がそれを相克するだけの効果までは持ちえなかったということが考えられる。

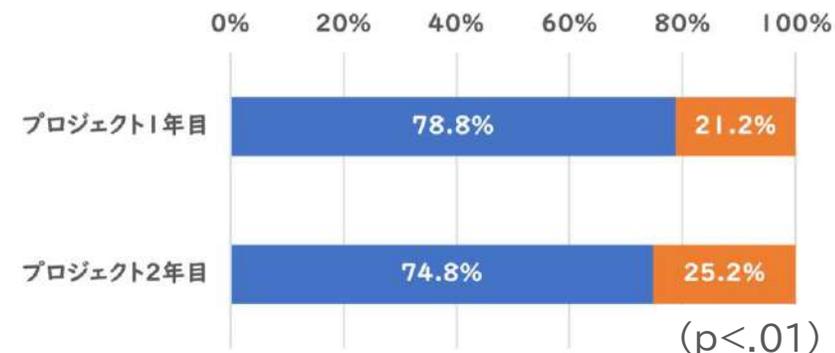
この学校のことが好きだ



この学校のルールは適切だと思う。



この学校の先生は、生徒の意見を聴いてくれる。



生徒への質問紙から ③学校間の比較

アンケートを実施した実証事業校間で、生徒アンケートの回答傾向を比較してみたところ、下記のように、学校への認識も社会への認識も相対的に高い学校、学校への認識が相対的に高い学校、社会への認識が相対的に高い学校、どちらも相対的に低い学校と、学校によって生徒の数値の傾向も多様になっており、様々な実施条件や実施方法によって生徒への効果も異なりうることが示唆される。例えば、学校への認識・社会への認識がともに高い数値となっていた学校は、ルールメイキングの活動以外に授業や各種教育活動でも、ルールメイキングの活動と関連付けた内容を扱ったり、政治・社会参加を促す活動を行ったりしており、そうした学校全体での取り組みの重要性が推察される。

参加校	他の参加校の回答と比較して 有意(p<.01)だと認められた項目数 (学校への認識に関する項目)		他の参加校の回答と比較して 有意(p<.01)だと認められた項目数 (社会への認識に関する項目)	
A校	△ 4問	▽ 2問	△ 6問	▽ 0問
B校	△ 4問	▽ 0問	△ 1問	▽ 2問
C校	△ 1問	▽ 6問	△ 0問	▽ 3問
D校	△ 4問	▽ 0問	△ 0問	▽ 8問
E校	△ 0問	▽ 6問	△ 5問	▽ 1問
F校	△ 6問	▽ 1問	△ 4問	▽ 2問
G校	△ 1問	▽ 5問	△ 0問	▽ 3問

△肯定的回答の割合が有意(p<.01)に多かった。▽肯定的回答の割合が有意(p<.01)に少なかった。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (4)小括:調査結果からみえる教員や学校の変化

①担当教員の変化

プロジェクトに参加した教員は、さまざまな場面で生徒の声に耳を傾けようとする意識が醸成されている。これまでは頭ごなしに否定してきたような意見もまずは聞き入れてみるという語りが見られたり、生徒-教員間の関係性をフラットに組み替えることで、生徒にとって話しやすい・相談しやすい対象になろうと務める姿が見受けられた。さらに、もともと教員主導となりがちであった「授業」の場面においても、「教師が一方的に話すのではなく、生徒が参加できる授業づくりに努める」など、ルールメイキングを通じて授業の手法・内容・姿勢にも変化が生まれていた。

②学校全体の変化 - 教員全体について

教員全体として校則・ルールが適切であるという意識が高まったことはもちろん、プロジェクトを通じて生徒への信頼感が醸成され、校則以外の学校行事や服装の見直し等の場面においても、実際に生徒たちに任せる取り組みが広がってきている。プロジェクトに関与した教員が、より「私は、生徒の力を信じている」「生徒の意見を聴くことで、学校をより良くすることができる」と感じているという結果も、こういった生徒への信頼醸成が広がりつつあることを示している。また、プロジェクト開始時から2年目終盤の変化として、「この学校のほとんどの教員は、変化に対して前向きである」の項目の増加に見るように、教員間においても対話的風土が醸成され、フォーマル(職員会議等)/インフォーマル(一対一での会話等)の場での意見表明が活発に行われるようになったことは注目に値する。このように教職員間での対話を繰り返すことで、部活動やアルバイトの許可制、制服、進路指導など、これまで学校として当たり前に行ってきた指導や業務についても、「そもそも」に立ち戻って再検討する動きが高まり、実際に見直しに繋がったケースも存在した。

③学校全体の変化 - 全校生徒について

全校生徒の変化として、「生徒が協力すると、この学校に良い変化が起こる」「自分の意見には価値があると思う」といった自己効力感や参加意識が高まっている。コア以外の生徒からも、校則やそれ以外の場面において、新たな提案や主体的な活動が生まれつつある。さらに、このようなポジティブな側面だけでなく、教員の生徒指導のあり方等に対して疑問を持ったり、生徒から教員に対して「こういった指導はやめてほしい」といった直接的・間接的に意見表明も行われるようになっていた。こういった変化の背景には、プロジェクトを通じた生徒-教員間の信頼関係の醸成や関係性を見直しが関係しているものと考えられる。

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (5)総合考察

教員や学校の変化につながる要因や条件

ここまでみてきたのは、主に対象校全体の傾向であったが、他方で学校間での違いが少なからずあったことにも目を向けておきたい。こうした学校ごとの違いや多様性がなぜ／どのように生まれるのかを考察するうえでは、「学校変化のメカニズム仮説」でも示したように、ルールメイキングの取り組み単体だけでなく、他の活動や取り組みを支える条件などとの関係で捉えていくことが大切だと考えられる。

以下に、それぞれの学校での取り組みや環境条件の違いに注目する中でみえてきた、変化に繋がるいくつかの要因や条件を挙げる。

(1)学校のビジョンとの関連性

ルールメイキングの意義が学校の目標やビジョンとの関連づけられ、学校づくりの中にしっかりと位置づいている学校では、学校関係者にとってルールメイキングが一つのアイデンティティや文化になっており、教員や生徒全体への浸透にも効果が示唆された。

(2)授業や他の教育活動との連携

授業や他の教育活動でも、ルールメイキングと関連した内容を取り上げたり、社会や政治に目を向け参加することを促したりする機会が作られたりしている学校では、ルールメイキングの活動に中心的に関わる生徒以外でも、生徒の主体的な活動の広がりや効力感の醸成、社会参加意識の形成といった効果がみられる傾向があった。

(3)管理職の役割

管理職によるルールメイキングへの後押しや、その目指す考え方の浸透に向けたリーダーシップが、教員の意識変化や、生徒の主体性を尊重する学校づくりを進める鍵となっていた。(ただし管理職主導の取り組みという側面が強い学校の場合、これは管理職のリーダーシップへの依存という課題にも繋がっていた。)

調査研究によるルールメイキングの効果検証 (5)総合考察

今後に向けた課題

(1)全校生徒への効果波及

全校生徒へのアンケートの結果からは、活動に中心的に関わった生徒だけでなく、生徒全体にもある程度波及効果がみられる部分もあった。ただ、肯定的回答の割合は増加したものの伸び幅は限定的であることから、全校生徒にまで十分な効果がみられたとはいまだ言えないところも大きい。先述した授業や他の活動との連携など、全校生徒にも効果を広げていくことが引き続き今後の課題といえる。

(2)教員間の対話の必要性

ルールメイキングの取り組みが、教員の意識変化や学校の対話的風土の醸成に寄与する可能性も見えてきた一方で、教員アンケートでは活動に関わったことがある教員と他の教員とで意識の差がみられ、インタビューでも他の教員の主体的な参加を促す難しさが語られるなど、課題もある。校則見直しは、これまでの校則や生徒指導についての考え方、ひいては学校や教育のあり方もときに問い直すものでもあるため、学校組織としてのまとまりをもった指導や教育活動のためにも、教員同士の対話が重要と考えられる。こうした対話の重要性が、実際に新たな校則やルールを適用し始めた学校の事例からも、改めて浮き彫りになった。

(3)保護者・地域住民とともに変わっていく必要性

ルールメイキングの活動は、保護者や地域住民の学校に対するまなざしを変えていく可能性をもつ一方で、保護者や地域住民の理解があってこそ校則見直しが進むという側面も見受けられた。学校と保護者・地域住民のどちらかだけが変わろうとしても、歩みは揃わない。目指すビジョンを共有し、対話や相互理解を図りながら活動を進めていくことが肝要であることが示唆された。